

## キルケゴールに於ける「イロニー 克服」の問題について

小 林 修

### 序

キルケゴールの処女作「イロニーの概念について——絶えずソクラテスを顧慮しながら——」は、彼が実名で発表した著書であり、かつそれが学位論文であるということから、人は一見して彼の偽名による著作に比してその理解は容易であろうと思ひ込みがちであるが、彼の他の著作の場合と同様、そこに著者キルケゴールの真意を正確に読み取るうとする者にとっては、思いがけぬ困難が待ち受けていて、実に問題の多い、その意味では複雑な構造と深い背景とをもった作品である。この論文は従来のキルケゴール研究者並びに批評家により、概ね否定的な評価を下され、最近になって漸くその重要性が確認されるようになったのであるが、この評価の歴史的経緯そのものがこの作品理解の困難さを如実に物語るものと言えるであろう。

この論文の一般に理解されにくい点はさておいて、従来行なわれてきたところのこれに対する評価が概して否定的であった

理由は奈辺に存するのだろうか。「イロニーの概念」段階に於いては、未だ彼のキリスト教的思想家としての立場は明確に打ち出されてはいない、従って実存哲学者としてのキルケゴールの独自性はこの「イロニーの概念」に於いては認め難いといふのが、従来の大方の研究者ないし批評家達の一致した見解であった。その第一の理由として、当時のキルケゴールがヘーゲル哲学の圧倒的な影響下にあった点がまず指摘される。事実この論文はそこに於いて使用されている概念規定はもとよりその用語法に至るまでヘーゲル哲学からの借物であることは明白である。このようなヘーゲルからの影響が余りにも前面に押し出されているために、「イロニーの概念」の中にはキルケゴール独自の思想が現われ出るだけの余地はほとんどないであろうという印象を強く与えることになり、ひいてはそれが「イロニーの概念」軽視の傾向を惹起せしむるに至ったものと考えられるのである。更にもう一つの理由は、キルケゴール自身「著作家としての私の活動の視点」の中ではこの「イロニーの概念」を彼の著作の中に入れていないのであり、彼の他の偽名の著作に於いても、これに関しては何も明確なことを述べていないし、彼の遺稿の中には、処女作「イロニーの概念」をみずから見くだすような内容の記載すら見出される、という一連の事実である。これらが「イロニーの概念」に対して否定的な評価を生ぜしめかつそれを助長せしむるに至ったその有力な一因と考えられるのである。

しかしながら、キルケゴールの著作そのものに固有な複雑さ、

並びに彼の思想発展の内的メカニズムの秘密、これらを解明することに一層の努力が払われるようになった現在に於いては、「イロニーの概念」に対するこれまでの否定的評価は全面的に覆されることとなったのである。そして今や我々は「この作品こそキルケゴールの著作の真の出発点である」と最初に主張したデンマークの研究者ブランドスの見解にもう一度立ち戻って考え直してみなければならぬ。

「イロニーの概念」の内容に直接触れ、その最も重要な問題が何であったかを検討する前に、この論文の成立事情に関して今ここで若干述べておくことが必要かと思われる。

## I

一八四〇年(キルケゴール二七歳)から四一年にかけての期間は、彼の全生涯に於ける他のいかなる時期に較べても少しもひけをとらないほど生産的かつ激動の時代であった。キルケゴールはコペンハーゲン大学に於いて十年間学んだ後に神学試験を「称賛に値する」成績で合格した。それは一八四〇年七月三日のことであった。それから二週間も経ないうちに彼はコペンハーゲンを立ってユトランド地方へ三週間の旅に出た。この旅行は彼の亡父ミカエルの生れ故郷を訪ねるためのものであった。八月の中旬この旅行から戻った彼は出来る限り早く学位論文を提出しようとする準備に取りかかった。九月八日彼はレギーネ・オルセンに結婚を申し込んだ、そしてその二日後に彼は承諾の返事を受け取った。十一月十七日彼は王立牧師セミナーに

入籍し、ここで説教のための実地訓練を受け、彼にとって生れて始めての説教を一八四一年一月に行なった。以上の如き事実を追って行く限りでは、当時の彼は表面的には、結婚を決意し、牧師としての生活をつづけながら、恐らくは大学からの招きを待つという考えで居たものと思われる。丁度この時期に彼は学位論文「イロニーの概念について——ソクラテスを絶えず顧慮しながら——」を書き上げたのである。この論文は当時の慣習を破ってラテン語でなく母国語のデンマーク語で書かれ、一八四一年六月三日コペンハーゲン大学に提出された。

ヒルシュは「イロニーの概念」の独訳書の序論の中でつぎのように述べている。「この論文の計画は一八三七年(キルケゴール二四歳)にまで遡るものと考えられる。実際第一部の三つの章は一八三八年に書かれていた」と。更にそれに続けて「キルケゴールはこの論文の全体を僅か十一月で仕上げたのはこの期間中は余りにも多くの他の仕事に巻き込まれていたのである。つまり、一八四〇年から四一年にかけての十一月の間で『イロニーの概念』の全体を書き上げることは当時の彼の多忙な生活から考えてとても無理なことである。恐らくこの論文の主要部分を書き上げるのに十一月を要したのである……しかし彼のこの論文を読んでも、第一部と第二部との間に文体の違いがはっきりと認められる。」と述べている。この点に関する限りヒルシュの指摘は正しいと考えて差しつかえない。

しかしそれにしても、論文作成のための集中的な作業が右の如き多忙な十一月の間に行なわれたという事実は注目に値す

る。しかもこの論文で取り扱われる文献は、プラトンの多数の対話篇、クセノポンの「メモラピリア」、アリストパネスの「雲」の他、ソクラテスに関する当時のドイツ諸文献を含み、特にヘーゲルに関しては「哲学史」、「歴史哲学」、「美学」、「法哲学綱要」、「論理学」、そして「ゾルガー遺稿集の書評」等に至るまで眼を通してることが知られる。更にフイヒテの著作や遺稿、フリードリヒ・シュレーゲルの小説「ルチンデ」、ティークの戯曲、小説、詩等、そしてゾルガーの遺稿集、特にその「美学」等が取り扱われている。これだけの文献に当ってみるだけでも相当な仕事であり、それら諸文献を駆使して三〇〇頁を越えるほどの論文を僅か十一カ月の短期間に書き上げるとなると、如何に才能に恵まれた人間とはいえ、とても不可能に近いことであることは推測に難くない。しかもなお驚くべきことには、キルケゴールのその後の生涯を決定したともいべきレギーネ・オルセンとの婚約の期間が、この論文執筆の時期と重なっていることである。一八四〇年九月十日キルケゴールは彼女と婚約し、翌年八月八日に指輪を送り返すことによって婚約解消に踏み切っている。四一年七月十六日にコペンハーゲン大学哲学科に論文は提出されたのであるから、内的危機をはらんだ彼の婚約期間中まさに激しい精神的集中を必要とする彼の論文作成の仕事も同時になされていたことになるのである。このような経過を辿って論文は書かれたわけであるが、この論文成立の背景にはなお幾多の体験が横たわっているのである。つまりこの論文が彼の心の中に芽生えてから、その完成をみるまでの間に

は実に多くの経験がなされている。彼のいわゆる「大地震」があり、その後の「放蕩生活」があり、そして彼に覚醒のラッパを吹き鳴らして精神的危機から彼を救い出すきっかけを与えてくれた恩師ポウル・メラア教授の死があり、父との和解に続いて父の死があり、彼自身の宗教的回心の体験があり、「今なお生ける者の手記より」の発表がある。そして父の死後、生前の父との約束を果たすため、それまで中断されていた神学国家試験のための準備を再開し、それに合格するや、学位論文の作成にかかり、その間レギーネとの婚約並びに解消といったドラマチックな事件もあったことはすでに見た通りである。彼におけるこれら一連の諸体験の中で私はとりわけ「イロニーの概念」の主要テーマとの関連性に於いて彼の宗教的回心の体験を重視したい。という訳は、彼が右の如き精神的な経過を踏まえた上で「イロニーの概念」を書いていることに、そして「イロニーの概念」の根本テーマは絶対的否定性としてのイロニーの克服にあったと考えられるところから、そしてしかもこのイロニー克服の体験的な裏付けを彼に与え、結局は信仰によって生れかわる以外に無限的且つ絶対的なる否定性としてのイロニーを克服する道はないとの確信に彼を立たしめるそのきっかけをなすものこそこのキリスト教的回心の体験であったと考えられるからなのである。

## II

キルケゴールの「イロニーの概念」に於ける主題的意図とし

ては、以下の如き基調テーマの諸論点が考えられると思われれる。彼方にはヘーゲルの思弁哲学、此方にはシュレーゲルに代表されるロマンチズム、この対立を克服する第三の道は残されていないかどうか、もし残されているとすると、それはどのような可能性としてであろうか。キルケゴールにとって、ヘーゲルの体系には人間の最も大切な人格が欠けている、少くともヘーゲルの哲学内では人格は充分生かされているとは言いがたい、それはヘーゲルのソクラテス解釈からもしっかりと窺える点である。というのはヘーゲルによればソクラテスのイロニーなるものはイデー(理念)を実現するための一契機にすぎないのである。ソクラテスは歴史上始めて主観性(Subjektivität)を持ち込んだ人間であり、しかもその主観性はギリシア国家の実体性(客観的倫理性)を破壊せんとするものであるが故に、これは誤った主観性である。従ってこのような主観性に支えられているソクラテスのイロニーなるものは、理念を実現するための方法ないし手段としての意味をもつものでないかぎり、その妥当性を有しない、正当なものとは認められない。キルケゴールはこのヘーゲルのソクラテス解釈に対してほぼ全面的な支持を与えるのであるが、ただヘーゲルは主観性を個々の人間の、更には人類の歴史全体の発展過程に於いて克服されなければならない一契機であると思ふ場合、それはキルケゴールに言わせるならば余りにも簡単に主観性のもつ重大さを片付けてしまっているということになる。主観性を飽くまで主張する、それも自己の生き方全体をぶつけて主張する、つまり、人格的裏付けをも

って主張することは歴史的現実的妥当性を有することもあろう。そのような強烈な主観性の主張をソクラテスのイロニーの中に見ようと試みたのがキルケゴールであった。<sup>(3)</sup>キルケゴールにとってはヘーゲルの言うような一手段・方法としてのイロニーに止るものではなくして、ソクラテスの全人格がそれにかかっているという意味では正にこれこそソクラテスの実存形態なのであり、キルケゴール自身の言葉を以てするならば「ソクラテスはイロニーを単に用いた(利用した)だけでではなくして、イロニーに全く完全にその身を捧げたのであり、それ故ソクラテスはみずからイロニーの犠牲になって倒れた<sup>(4)</sup>」のである。ソクラテス解釈をめぐりヘーゲルとキルケゴールとは主観性に置く力点がそれぞれ大きく異なっている。キルケゴールがソクラテスのイロニーに認めたところの「無限的且つ絶対的の否定性」としてのイロニーは主観性の最も重い、最も強烈な表現でもあったのである。又キルケゴール自身の言葉を借りるならば、「哲学が懷疑から始まるように、人間の名にふさわしい生活はこのイロニーを以って始められる<sup>(5)</sup>」のであるから、主観性の強烈な表現であるイロニーは人間にふさわしい生活、つまり人格に裏打ちされた生活に欠かせない第一歩だということになる。ここにキルケゴールは真に人間の生活にとって主観性がどれほど重い意味をもっているか、それを、ソクラテスのイロニー自らに語らせることを以て確認し、ヘーゲルのソクラテス解釈をヘーゲル自ら認めているところの「ソクラテスの場合には、思弁は個人的生活ほどには問題になりえない」或いは

(同じことであるが)「ソクラテスの哲学は思弁哲学であるよりは個人的行為なのだ」という方向に一步を進めているのである。

ソクラテスのイロニー解釈に於いてキルケゴールの重要視するこの主観性の主張を最も極端に行なったのがシュレーゲルに代表されるロマン派の人達であった。その意味でロマンテイカーはキルケゴールとその内的要求の基本線に於いて共通なものをもっていた。<sup>(8)</sup>しかしながらソクラテスのイロニーによって主張された主観性は歴史的(世界的)妥当性を有していたのに反して、ロマン派の人達のそれ、即ち *Romantische Ironie* はそのような普遍妥当性を獲得することが出来なかった。それは「主観性の主観性」即ち「主観性の二乗されたもの」であり、主観性の最尖端であったからである。とはいえ、このようにロマンティッシュ・イロニーを規定したのはもっぱらヘーゲルであるが、キルケゴールは一応それをロゴス的には受け入れながらも、パトス的にはロマン派の人達にヘーゲルとは異なつた親近性ないし同情・同感する面を心の内に秘めていたのである。<sup>(9)</sup>であったからこそ、彼はヘーゲル哲学に不満のはこ先を向ける場合にこのロマンティカー達の主張を同時に彼自身のものでもあるかのように用いたのである。キルケゴールはヘーゲルに立ち向う時、ロマン派の立場ないし主張を探り、逆にロマンティカーに向う場合今度はヘーゲル哲学の力を借りるといった、或る意味では誠に不誠実な対処の仕方をしてゐるわけであるが、これは彼自身の内部にすでに醸し出され、深刻な闘争を繰り返

してきたところの二大勢力の彼自身の場に於ける対決の様相を正に反映するもの以外の何ものでもないのである。且つキルケゴール自身にしてみれば、「イロニーの概念」を書くということとは、彼自身の内部に於いてこれまで続けられてきた格闘をここにあらためて問題として取り上げることによって、その最終的な決着をこの論文に於いて見出すことが出来るのではなからうかという期待を以ってなされたのである。その意味で「イロニーの概念」は正にそれ自身の弁証法を自らの内に蔵していると言えるであらう。

キルケゴールはヘーゲル哲学とロマンチズムとを相拮抗させ、一方を他方によって攻撃し、又他方を一方によって批判するといったいわば「相互抹殺の作戦」をこの論文に於いてとっていることは既に述べたところであるが、このようにどちらも本来自分の敵——と言うより、自らそれを克服せねばならぬ課題——でもあるものを相互にぶつけ合わせ、そこに激烈な消耗戦を展開させる、そしてしかも自分だけは第三者として傷つかずに高みの見物をしてゐるといった、虫のいい、いわば漁夫の利を貪る立場にキルケゴール自身は置かれてゐるのではなくして、この戦いそのものが彼自身の内部で行なわれているのだという点に、つまり、戦場は同時に彼自身の思想形成の場であり、攻撃する側も又それを受ける側も共に彼の内部にあり、戦いの決着如何に彼の今後の生きる方向が賭けられてゐるといった——キルケゴール自身にとつてもそれによって決断を下さねばならぬ——大事な一戦であつたのである。キルケゴールはこのよ

うにみずからの内に潜む勢力を互いに戦わせることによつて——それは取りも直さず彼自身を燃やし、彼自身を喰ひ、みずからを消耗させて生きる生き方をとること以外の何ものでもないわけであるが——それらの勢力を克服する新らたな道を自分自身のために用意すること、即ち自らの犠牲においてキリスト教的なものとの正しい出会いの道を見出すこと、これがキルケゴールの「イロニーの概念」を書いていた時の狙い、つまりこの論文を書いたキルケゴールの意図であつたのではなからうか。

## III

キルケゴールのイロニー克服の課題は彼の「イロニーの概念」に於いて如何なる解決を与えられているのであるか、つまり彼は結局何によつて、如何にイロニーを克服するのであるか、次に我々はそれを問題にしなければならぬ。その際我々はまず、キルケゴールとヘーゲルとの間にはそのイロニー解釈をめぐり如何なる差異が存在するか、それをつきとめることから始めようと思ふ。両者の相違点が確保されるならば、そこに自ずとキルケゴールのイロニー克服への方向が指し示されるであらうからである。

ソクラテスのイロニー解釈をめぐる両者間の根本的相違点に關してはすでに述べたところである。キルケゴールはソクラテスのイロニーを絶対無限の否定性として把えることによつて、ヘーゲルのソクラテス(イロニー)解釈——それはソクラテスの対話の形式、人間關係における振舞い方を理念を実現するた

めにソクラテスが用いた哲學的方法と觀る——をしりぞけるのであるが、ここでキルケゴールの用いた「絶対無限の否定性」というイロニーの根本規定は元來ヘーゲルがロマンティッシュ・イロニーに適用した規定である。それではキルケゴールのロマンティッシュ・イロニーに対する態度は如何なるものか、基本的には彼も又ヘーゲルの線に沿つて進むわけであるが、そこに微妙な差異が生じてくる。我々はこの点に注意を向けなければならぬ、ではキルケゴールがロマンティッシュ・イロニーに對する場合、ヘーゲルと共に進むことの出来るのは奈辺までであらうか。キルケゴールはつぎのように書いている「へ主觀性が、すなわち自我が構成的な權能を有し、唯一の全能者である」というこのフイヒテの原理が、シュレーゲルやテイクを捉えたのであり、そして彼らはこの原理から出發して世間で活動したのであつた。そのさい、二重の困難が生じた。第一に、經驗的で有限的な自我が永遠的な自我ととり違えられた。第二に、形而上學的現實が歴史的現實ととり違えられた。こうして未成熟な形而上學的立場がそのまま無造作に現實に適用されたのである。フイヒテは世界を構成しようとしたが、しかし彼の考へたのは一つの体系的な構成であつた。シュレーゲルやテイクは一つの世界をでっち上げようとしたのである。

右のことから、このイロニーが世界精神に奉仕するものでなかつたことが知られる。新しい契機によつて否定され排除されるはずだつたものは、あたえられた現實の一契機ではなかつたのである。そうではなしに、このイロニーが手製の現實のため

に席を設けようとして否定したものは、いっさいの歴史的、現実的であった。ここに出現せしめられようとしたものは、主観性ではなかった。なぜなら、主観性はすでに世界事情のうちにあたえられていたのだから、そうではなくて、それは一つの誇張された主観性、主観性の二乗であった。このことから同時にまた、このイロニーがまったく正当な権利をもつものでなかったというところが、このイロニーに反対するヘーゲルの態度がまったく筋のおつたものであることとあわせて、知られるのである。」<sup>(11)</sup>と。時間的な自我を永遠的な自我と、即ち、歴史的・經驗的の自我の有限性と形而上学的自我の無限性とを取り違えてしまい、現実における基本構成的なもの、現実を秩序づけ支えるものである一切の道徳と人倫的実体性とを無視する(権能を自我に認めることによって否定者として、自我を絶対化する)このイロニーの恣意性をキルケゴールはヘーゲルとともに主観性の逸脱、歴史的現実的妥当性を有しない主観性の主張と見做して、ロマンティッシュ・イロニーを原理的に批判していることが明らかである。

しかしながら、キルケゴールは他方イロニーの概念についてのヘーゲルの解釈全体が侵されているように見える一つの弱点を指摘している。それによると「ヘーゲルは常にイロニーについては極めて排撃的なきたかたで論じており、イロニーは彼の目には唾棄すべきものである。」<sup>(12)</sup>それは、シュレーゲルの最も華々しい時期がヘーゲルの出現と丁度時を同じくしているためもあるが、「ヘーゲルがこのように彼の最も身近にあったこの形

式のイロニー(ロマンティッシュ・イロニー)から影響をうけたという事情が、当然のことながら、この概念についての彼の解釈にわざわざしたのである。」<sup>(13)</sup>とところで、こういったからと言って、ヘーゲルがシュレーゲル兄弟に対して公正さを欠いているとか、シュレーゲル流のイロニーがすこぶるいかがわしい邪道でないとか言おうとしているのでは決してない……。そうではなくて、その反対にここで言おうとしているのは、ヘーゲルが一面的にフィヒテ以後のイロニーに敵対することによって、イロニーの真相を見おとしているということ、また彼がすべてのイロニーをこれ(「フィヒテ以後のイロニー」と同一視したことによって、イロニーの扱いを誤ったということ)となのである。」<sup>(14)</sup>そして更にキルケゴールはヘーゲルが「ゾルガーの遺稿集の書評」のなかでフリードリヒ・シュレーゲルを非難している点をつぎのように指摘している。「シュレーゲルは、思弁的なものに対する無理解とそれの無視とのゆえに、(自我の基本的妥当性)に関するフィヒテの命題をその形而上学的連関から引き離し、それを思惟の領域から引き離して、それを直接に現実に応用したために、『結局理性と真理のいきいきした生命を否定し、それらを主観における仮象、他者に対してそう見えるだけのものに引き下げってしまった。』」<sup>(15)</sup>と。

以上の様なヘーゲルのロマンティッシュ・イロニーに向けられた非難に対して、キルケゴールは或る不満をもっていることがうかがわれる。それは、要するに、ヘーゲルのイロニー解釈がすべてのイロニーを彼と同時代のロマン派的イロニーと同一

視することによって、イロニーの扱いを誤まっていること、そしてそのためソクラテスと世界史におけるイロニーの真正の意味が見過ごされていることにあるといえよう。キルケゴールはソクラテスのイロニーにみられるような否定性の情熱を単に歴史的發展の一契機にとどまらない個人の主体的な働きとして捉え、そこに根源的な人格の意義を積極的に認めようとしていることはすでに述べた通りである。キルケゴールが「体系における否定的なものには、歴史的现实におけるイロニーが照応する。歴史的现实のうちには否定的なものが現存しているが、この否定的なものは体系のうちにある否定的なものでは決してない」というのもその意味であろう。この点にこそヘーゲルのイロニー解釈に対する不満が集中されているのである。ヘーゲルによって「主観性の尖端」ときめつけられたロマンティッシュ・イロニーに対してもキルケゴールは一方では、ヘーゲルと共にそのイロニーの反人倫性、恣意性を批判することを通じて、このイロニーの根底に美的虚無性が潜んでいることを見抜くのであるが、また他方に於いて、このイロニーの積極的側面を美的形而上学的立場から生かそうとする。ヘーゲルがこのイロニーを単に実体性なき、悪しき主観性の天才的遊戯性にすぎぬものとして、従って倫理的立場からは唾棄すべきものとして、一方的に排撃し、どこまでも敵対的な態度を以って遇するこのヘーゲルのロマンティッシュ・イロニー解釈の偏狭さに対してキルケゴールは不満のホコ先きを向けているのである。キルケゴールによれば「与えられた現実が常に必ずしも真に現実的でなく、

即ち現実でない現存在がまた存在するのであり、更に又人格性の中には少なくとも刹那的には現実と同じ尺度でははかれない何ものが存在するのである」とされるかぎり、ロマン派のイロニーにおいて追求される詩的に生きることの内的無限性は、たとえそれが真の内的無限性ではないとしても切実なる人間性の要求として積極的に評価されなければならないのである。「人間は道德的なものが人間に要求するのと同じくらい大きな要求を詩的なものに対しても求めている」だけに、反人倫的側面からのみこのイロニーを捉えるヘーゲルの解釈は、イロニーをより高い現実に向かうために直接的な現実を否定する主体的情熱として観る美的形而上学的立場からの解釈によって補正されてこそ、このイロニーは正当な評価を獲得することになるといえるのである。しかしながら、キルケゴールはロマンティッシュ・イロニーの場合真に「詩的に生きる」ことにはならず、従って内的無限性を取り逃がしているとなす。それは「断念を通してはじめて真の内的無限性は現われるのであり、この内的無限性にしてはじめて真に無限であり、また真に詩的であるから」である。ここにはロマン的イロニーを彼自身の完教的体験の深みから、つまりキリスト教的回心の体験に基づいてそのイロニーの否定的側面を批判すること——それは取りも直さず彼の自己批判にはかならないわけであるが——を通して超克するとともに、「キリスト教的に生れかわることによってのみ、真の意味での人間性の享受は達成されるのであり、『詩的に生きる』の究極的な意味もまたそこを求められねばならないのだ」



と言いつけるキルケゴールの確信がある様に思われるのである。かくして、ヘーゲルにとっては単に一つの否定的モメントにすぎなかつたものが、キルケゴールにとっては否定的な一つの概念となるのである。この否定的概念とは、反省を媒介にして築き上げられた体験を組織化し、集約化したものであり、これは体系内での弁証法の早わざによって片付けられるようなものではなく、それは本来自己自身を喰ひ尽し、燃やし尽し、みずからを消耗させることを通じて、即ち弁証法的に生きることを通じてはじめて自己の体験として生き残る性質のものなのである。そしてこれは、彼がイロニーを自己の当面の克服されねばならぬ課題として取り上げるに至るまでの彼の危機的体験——それが如何に深い否定性に貫かれていたか、そして彼がその否定性をどれほど主体的に押し進めてきたか、その激しい精神の格闘の跡を我々は彼の書き残した日誌の中に見ることが出来るのであるが——このいわば彼の実存的内面性の危機を充分に考慮することなしには、理解され得ないものであろう。

彼のこの否定性克服への努力こそ、「人間のものを主体的な人倫性、ひいては客観的学問のなかに静止させ、硬化凝固させることを、イロニーの無限的かつ絶対的な否定性をもって阻止する者こそソクラテスなのだ」とする彼の独自のソクラテス解釈と表裏一体の関係にあるものと言えるであろう。

かくして「ソクラテスの否定で無にされた人倫性や客観的知といった肯定性をさらに次元を高めたところでふたたびとりもどすもう一つの契機が、その裏で、それを覆い包むものとして

キルケゴールにおいて同時に用意され示唆されていること」に我々は注目しなければならぬのである。そこにこそ、ソクラテスの「無限的かつ絶対的な否定性」としてのイロニーがキルケゴールによって最終的には否定性として「統御されたる一契機」とされる意味もあるのだからである。しかし否定性としてイロニーが統御されるためにはイロニーの主体が直接的人間性を超えたところに横たわる一つの観点に立たねばならぬはずである。ところでキルケゴール自身の場合には、それは回心という信仰の体験によって獲得されたキリスト教的人生観なのである。しかも彼はファウスト的懷疑から果ては自殺を考へるところまでのいわば絶対的否定性の体験を地で行き、挫折又挫折の絶望的状态からキリスト教に戻ったのである。この新しい観点から絶対否定性としてのイロニーを克服しようと試みたのが「イロニーの概念」——たえずソクラテスを顧慮しながら——であったのである。この論文の内的構想がキリスト教的な人生観に結局は支えられたものであると言っても、この論文でキルケゴールはキリスト教的なものを直接前面に押し出しているわけでは決していないのであって、ソクラテスの観点である「無限的かつ絶対的否定性」としてのイロニーから発展した「統御された一契機」としてのイロニーの思想の中にそれを隠し持っているといった方が正しいであろう。

この論文の中には、後のキルケゴールにおいてその展開を見るところの彼の生活と思想とを貫ぬく根本問題が、いまだそのおぼろげな輪郭しかもたぬ萌芽的形態にとどまっているにせよ、

すでに現われ出ているのである。それは即ち、あらゆる人間的なものの真の意味とその深さとは、キリスト教的的人生観によつてのみ把握されうるものであること、人間的なものはずべてそれみずからによって自滅の道をたどる運命にあること、そしてキリスト教的に生れかわることによつてのみ人間は真の意味での自己自身に成ることが出来ること等に要約されよう。そしてしかもそのようなキルケゴールに固有な諸問題を彼がヘーゲル哲学の思考方法を用いて取り扱っている所はこの論文が歴史的研究を装いながらヘーゲルの哲学体系に対する攻撃であることと合わせ考へるならば二重にイロニー的であると言へるのである。実存弁証法の両極端——即ち一方はイロニーの無限的かつ絶対的否定性によつて人間的なるもの一切が無に帰せられてしまふとん底、他方は人間に賦与せられたる一切のものがキリスト教において完全に成就されるという頂点——この両者を結ぶものというより一方から他方への飛躍を可能にするもの、それは思弁の体系の中にはなくして、個々の主体の生れかわりの体験の中にこそ求められるものだとする限りに於いて、キルケゴールはヘーゲルを越えて出ていると言へるのである。我々は、キルケゴールの最初期の作品にして唯一の論文「イロニーの概念」に於いてすでに、その生活と思想とをたえず重複させつゝ練り上げて行く彼本来の努力の跡を辿ることができるのである。

- (1) 一八五〇年秋に書かれた彼の日誌参照。  
 (2) ヘーゲルの概念に於いては、道徳性 *Moralität* は主観的なものであり、その主観性である道徳性を媒介契機と

- して成り立つ客観的なものが人倫性 *Sittlichkeit* である。  
 (3) vgl. „über den Begriff der Ironie“ übersetzt von E. Hirsch, 1961, S. 171—172.  
 (4) vgl. *Ibid.*, S. 269—270.  
 (5) vgl. *Ibid.*, S. 3, 第八テーゼ・「イロニーは、無限の絶対的否定性として、主体性(主観性)の最も軽く最も小さな徴しである。」を参照。  
 (6) vgl. *Ibid.*, S. 3, 第一五テーゼ:「哲学が懷疑で始まるのと同じように、人間的とよばれるに値する生活はイロニーで始まる。」を参照。  
 (7) ケーゲル「哲学史」(Hegel, *Geschichte der Philosophie, Werke, Jub. Ausg.* 18. S. 53) vgl. *Ibid.*, S. 172, 228, 233.  
 (8) 絶えざる変化に身を委ね、常に意外な結果を引き起すところの気分的なるものを強調する点、またただちに猷身的没頭を取り戻すところの冷笑的イロニー的傾向を有する点、更に又魂の奥深い所に経験を蔵している人にしてはじめてなりうるところの特殊的なるもの(例外者)の意味を重視する点等に於いて、確かにキルケゴールはロマンチズムと共通なものをもっている。vgl. *Søren Kierkegaard — Leben und Werke.* — Hayo Gerdtes, *Sammlung Göschen*, Bd. 1221, Berlin, 1966, S. 21.  
 (9) vgl. *Ibid.*, („Über den Begriff der Ironie“) S. 280—281, S. 294—295. ロマンチイカーの哲学的原理乃至立

場に対するキルケゴールの批判並びにヘーゲルのロマンティック批判の正当性に対するキルケゴールの是認。

(10) vgl. *Ibid.*, S. 270—271. ヘーゲルのロマンティック批判に対するキルケゴール自身の不満。

(11) vgl. *Ibid.*, 280—281.

(12) vgl. *Ibid.*, S. 270.

(13) vgl. *Ibid.*, S. 270.

(14) vgl. *Ibid.*, S. 271.

(15) vgl. *Ibid.*, S. 273.

(16) vgl. *Ibid.*, S. 266. なおキルケゴールは「イロニーの概念」一七一一—一七二頁に於いても同様に、次ぎの如く述べているのである。そこには彼によるヘーゲル哲学克服への方向が示されていて、その意味では「イロニーの概念」に於ける彼の本質的思想を含む重要な箇所の一つであると思われるので、長さを厭わず引用してみる。「ひとは一般にイロニーが観念的にとらえられ、その場所も体系のなかで消えてゆくモメントとして指示され、したがって非常に簡単に記述されているのを見いだすのになれている。ひとはそれが原因で、いかに全人生がイロニーのうちで過ぎゆくことができるかをそれほど容易には理解しえない。なぜなら、この人生の内容が無と見られねばならぬからである。しかしひとは、立場というものが人生においては、体系におけるほど観念的には決して見いだされるものではないということを思い起こさない。またひとは、イロニーが人生

における他のあらゆる立場と同じように、それ独自の攻撃、独自の闘争、独自の復帰、独自の勝利をもっているということを思い起こさない。同様に、例えば懐疑も、体系のなかでは消えゆくモメントであるが、しかし現実においては、懐疑は別の意味で多くの内容をもっているのである。これは純粹に個人的（「人格的」）な生活であり、学問はもとよりそれにかかりあわない……。しかしながら、そのことがどうであろうと、学問はこの種のもを無視することにおいて正しいことをしているとされるであろうが、個人的生活をとらえようとする者は、そうは為しえないのである。ところでヘーゲル自身が或る個所で「ソクラテスの場合には、思弁は個人的生活ほどには問題になりえない」と言っているのであるから、たとえこの試みが私の無力ゆえになおはなはだ不完全なものにとどまるとしても、私はきつとこの点に、私の試み全体において進めてきたやり方に対する正当化の根拠を認めることが許されるものと思う。」

(17) vgl. *Ibid.*, S. 258.

(18) vgl. *Ibid.*, S. 302.

(19) vgl. *Ibid.*, S. 295.

(20) vgl. *Ibid.*, S. 171—172.

(21) 邦訳書「キルケゴール著作集」21、白水社、一九六七年「イロニーの概念」、下巻、二九七頁参照。

(一橋大学大学院学生)